

## ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(4)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月24日に行われたロンドン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

---

The Times  
February 25, 2020  
Anna Picard

### 荘厳なラフマニノフがその他の元気のない曲目を救ってくれた

オーケストラが国外公演を行う際、母国の作品を演奏会に組み込むことは伝統的な行いである。東京を拠点とするNHK交響楽団が、自家製マーマレードとして持ってきたのは、武満徹の《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》だった。ベルの音と輝きに照らされ、オーボエ、フルート、クラリネット、ヴィオラによる警句的な旋律によって繋がれた、透明感のある音画の連続体だ。しかしこの作品は心に響くどころか、ほつれて元気のない感じがし、パーヴォ・ヤルヴィの刻む拍子が明らかに正確であるにも関わらず、拍感は頼りなかった。

時差ボケのせいだろうか？練習時間が足りなかったからだろうか？退屈なのだろうか？同じような問題は、ソル・ガベッタの演奏が甘やかで歌と動きに満ちていたにも関わらず、シューマンの《チェロ協奏曲》にも明らかに見て取れた。オーケストラ伴奏のピアノ的な音型はまるで生気がなく、縫いひだのようにきっちりとしているべき楽器の入りも染みだらけだった。

ではなぜ4つ星なのか？ラフマニノフの《交響曲 第2番》のおかげである。最初のコントラバスとチェロの、金とアスファルトを織り合わせたような最初の一音から、本当に素晴らしい演奏だった。ヤルヴィのリズミ的な柔軟性、トロンボーン、チューバ、バス・クラリネットの輝き、オーボエとヴァイオリンのしなやかさと冷静さ、各々の奏者の力強さと知性が合わさって、快楽的だがしなやかな解釈を生み出していた。

シューマンで欠けていた身震いするような戦慄と武満に欠けていた静謐さが、すべてここにあった。ホルンの地を這うような不穏さと死神のしかめっ面、イングリッシュ・ホルンの鷲鼻の歌、スケルツォ楽章の弾性とゆっくりとした微笑み、繊細なスネアドラムは、オーケストラのそれぞれのセクションがしっかりと自信と責任感をもって演奏していることを証明するものであった。

このラフマニノフは、準備が行き届いた演奏の模範例で、驚くべきデュナーミクの幅広さは、

強制されているとも利己的であるとも感じられなかった。ヤルヴィは音楽の抑揚を扇動するのではなく、あくまでそれを自然に起こしていた。アダージョの息の長い旋律は有機的で、最終楽章のトランペットから流れ出る銀色の走句は嘘のように安らかで、嘘のように愛らしく響いた。